特別展「白馬のゆくえ　小林萬吾と日本洋画50年」関連

講演会　聴講無料・要事前申込

◎「白馬会—美術で社会を変える試み」

黒田清輝ら結成の白馬会が、美術によって社会を変えようとするものでもあったことを新たな視点から講演いただきます。

日　　時：4月25日（土）　13：30～15：00
場　　所：地下1階　講堂
講　　師：山梨絵美子氏（東京文化財研究所　副所長）
定　　員：230名（先着順）
申込期間：定員になり次第終了

学芸講座　聴講無料・要事前申込

◎とある美術教授の眺めた時代

担当学芸員が特別展にかかわる内容をお話しします。

日　　時：5月16日（土）　13：30～15：00
場　　所：地下1階　研修室
講　　師：窪美酉嘉子（当館主任専門学芸員）
定　　員：70名（先着順）
申込期間：定員になり次第終了

講演会・講座の申込方法

電話、はがき、FAX、かがわ電子自治体システム(※)を利用したインターネットから。
はがき、FAXの場合は、氏名、電話番号、講演会・講座の名称を明記してください。

申込先：〒760-0030　高松市玉藻町5番5号　香川県立ミュージアム学芸課
TEL.087-822-0247　FAX.087-822-0049

ミュージアムコンサート　無料・当日受付

◎萬吾の歩いたフランス

小林萬吾がパリに滞在していた頃のパリの芸術家たちは、音楽に親しんでおり、それは彼らの作品制作にも影響を与えていました。
コンサートでは、その当時のカフェやサロンで演奏されていた曲や、展示作品に関連した音楽をご紹介します。

日　　時：6月7日（日）　14：00～15：00
場　　所：1階図書コーナー
奏　　者：ティローン・ランダウ氏（テノール歌手・作曲家）ほか
申　　込：当日受付（開演30分前から）

ワークショップ　有料・当日受付

◎アートさんぽと4コマまんが

100年前からこんなすてきな絵があるなんて。展示室で鑑賞のあと、もっと想像しちゃってオリジナル4コマまんがをつくります。

日　　時：5月5・6日（火・水祝）　各日①10:30～11:30　②13:30～14:30
場　　所：2階特別展示室と西ロビー
対　　象：小学生～一般
参 加 料：100円（一般の方は別途観覧料が必要）
定　　員：各回20名（先着順）
申　　込：当日受付（各回30分前から）

カフェポット ミュゼ

みなさまのお越しをお待ちしています。

ミュージアムショップ

特別展関連のオリジナルグッズを取り揃えております。

■営業時間：9:00～17:00（夜間開館日は19:30まで）

瀬戸内海歴史民俗資料館　観覧料無料

古城をイメージした石積みの外観が印象的な建築は「日本建築学会賞」をはじめ多数受賞した、建築家・山本忠司の代表作。
回廊式の展示室では、木造船や船大工道具などの民俗資料を中心に瀬戸内のくらしと文化をたどります。瀬戸内海が一望できる展望台もお楽しみください。

開館時間：9：00～17：00　※入館は16：30まで
休 館 日：月曜日（5月4日（月・祝）は開館）

テーマ展
昭和こども文化展—遊び楽しむ子どもたち—

各世代の子どもたちが夢中になって遊んだ流行の遊びや玩具などを取り上げるとともに、家庭や地域社会が行う子どもに関する年中行事などを紹介します。

会　　期：3月20日（金・祝）～5月24日（日）
場　　所：瀬戸内海歴史民俗資料館第9・10展示室
開館時間：9：00～17：00　※入館時間は16：30まで
休 館 日：月曜日（5月4日（月・祝）は開館）

れきみん普及事業　要事前申込

◎ワークショップ「瀬戸内探訪① — 仁尾 —」

古くから交通の要衝として栄えた仁尾の町や行事を当館の職員の案内により徒歩で見学します。

日　　時：4月26日（日）　12：30～15：00
場　　所：三豊市役所市民センター仁尾（仁尾支所）駐車場集合
講　　師：当館職員など
定　　員：25名
参 加 料：50円
申込期間：3月25日（水）～4月15日（水）必着

◎れきみんワークショップの申込方法

往復はがき（1枚につき3名まで）「かがわ電子自治体システム」(※)を利用したインターネットから。往復はがきの場合は、氏名（ふりがな）、住所、電話番号、児童生徒は学年、ワークショップ名を明記してください。申込者多数の場合は抽選となります。

申込先：〒761-8001高松市亀水町1412-2　瀬戸内海歴史民俗資料館
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784

※「かがわ電子自治体システム」を利用する場合

香川県ホームページ「電子申請・施設利用申込」
香川県ホームページ「お役立ち情報」のトップ「かがわ電子自治体システム」から「電子申請・届出サービス」をクリック

◎お得なミュージアムパスポートあります。

一般：3,130円／高校生以下の方、65歳以上の方、身体障害者手帳等をお持ちの方1,040円
※有効期間中（1年間）は歴史展示室と常設展示室を何回でもご覧いただけます。
※当館が主催する特別展を、会期ごとに1回ご覧いただけます。（本人2回目以降半額、同伴者1人半額）
※当館の旬な情報をお届けします。（年7回程度）

◎ミュージアム法人特別展観覧券あります。

一冊（30枚綴り）20,370円
※当館の旬な情報をお届けします。（年7回程度）

紙面で案内している催事の実施の有無等については、当館ホームページ等でご確認ください。

香川県立ミュージアム
〒760-0030 高松市玉藻町5番5号
TEL.087-822-0002（代表）　FAX.087-822-0043
https://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/

【分館】**瀬戸内海歴史民俗資料館**
〒761-8001 高松市亀水町1412-2
TEL.087-881-4707　FAX.087-881-4784
https://www.pref.kagawa.lg.jp/setorekishi/

【分館】**香川県文化会館**
〒760-0017 高松市番町1丁目10-39
TEL.087-831-1806　FAX.087-831-1807

●発行日 令和2年（2020）3月10日　●編集・発行 香川県立ミュージアム　●印刷 株式会社アイコー印刷

The Kagawa Museum NEWS

Vol.48　香川県立ミュージアムニュース　2020 春

小林萬吾「花鈿」1927（昭和2）年　香川県立ミュージアム蔵

CONTENTS

特集　白馬（はくば）のゆくえ　小林萬吾と日本洋画50年
調査研究ノートvol.32　木村黙老（もくろう）のファミリーヒストリー
—黙老ゆかりの資料をもとめて—
ミュージアムガイダンスvol.38　画像利用、資料閲覧対応について
れきみんだより　瀬戸内海歴史民俗資料館職員、子ども時代を大いに語る
令和元年度の展示活動報告 —開館50年に向けて —

特集

白馬（はくば）のゆくえ
小林萬吾と日本洋画50年

小林萬吾生誕150年を経て、半世紀ぶりに大回顧展を開催します。

香川県出身の小林萬吾（1868-1947）は、明治から昭和の戦後まで白馬会（はくばかい）や光風会、官展などの中央画壇で活躍した洋画家です。日本洋画の巨匠黒田清輝（1866-1924）に学び、大正初頭にヨーロッパ留学、のちに西洋の模倣を超えた油彩画の日本的表現を追究し、公には東京美術学校教授、帝国芸術院会員（現東京藝術大学教授、日本芸術院会員）の経歴を遺しました。

小林萬吾は明治元年に生まれ、本年は生誕152年となります。今日、あらためて小林萬吾に光をあて、萬吾の代表作と彼の50年にわたる画業の中でめぐり合う画家たちの名作を紹介し、日本洋画の歴史とその魅力を生き生きと映し出します。

画家へのあゆみ

1868（明治元）年、小林萬吾は讃岐国三野郡詫間村（現香川県三豊市）に生まれ、少年時代は金刀比羅宮の明道学校、愛媛県松山市の官立松山第一中学校に学びました。松山で高橋由一門人の図画教師に出会い、絵画に目覚めます。1888（明治21）年に上京し、高橋由一の甥の安藤仲太郎やドイツから帰国した原田直次郎に師事したのち、1895（明治28）年に黒田清輝と出会い、黒田と久米桂一郎が主宰する天真道場に入門します。10年間のフランス留学から帰国した黒田が持ち帰った明るい外光表現は萬吾を始め、若い画学生たちを一気に魅了しました。

黒田清輝「婦人像（厨房）」1892（明治25）年　東京藝術大学蔵

白馬のゆくえ

テーマにみる「白馬」とは、1896（明治29）年に黒田清輝の呼びかけのもと、萬吾を含む若い画家たちが結成した美術集団「白馬会」のことです。多感な青年期をフランスで過ごした黒田清輝にとって、日本の既存の美術会は堅苦しく、「白馬会」という自由な気風のグループを立ち上げ、技術の修練やフランス語の授業、成果を発表する展覧会開催などに取り組みました。「白馬」の名は颯爽と駆ける馬ではなく、実は庶民に親しまれていたどぶろく「しろうま」に由来します。どぶろくを片手ににぎやかに美術を語り合う若者たちの姿が目に浮かんできませんか。

黒田清輝「木かげ」1898（明治31）年　公益財団法人ウッドワン美術館蔵

白瀧幾之助「稽古」1898（明治31）年　東京藝術大学蔵

和田英作「渡頭の夕暮」1897（明治30）年　東京藝術大学蔵

児島虎次郎「和服を着たベルギーの少女」1910（明治43）年　高梁市成羽美術館蔵

金山平三「林檎の下（ブルターニュ）」1915（大正4）年　兵庫県立美術館蔵

小林萬吾「門付（かどづけ）」1900（明治33）年　東京国立博物館蔵

同年、白馬会結成の後、東京美術学校に西洋画科が新設され、明治初期に設立された工部美術学校以来20年ぶりに、官立学校で西洋画実習が行われるようになりました。黒田は指導者として招かれ、萬吾は西洋画科第1期生として入学し、2年間で卒業しました。その後、同校で助手、助教、1904（明治37）年には助教授となり、留学を経て、1918（大正7）年から1944（昭和19）年まで教授として後進の育成に携わりました。

めぐり合う人々

日本洋画の黎明から成熟期にいたる変動の時代に生きた萬吾は、一生のうちにさまざまな画家や文化人にめぐり合い、しばしばその人柄や出来事を回想しており、まさに歴史の証人です。交流した人物を一部紹介すると、新旧の巨匠原田直次郎と黒田清輝。天真道場以来の仲間の藤島武二、岡田三郎助、和田英作。白馬会や東京美術学校の同志、白瀧幾之助、湯浅一郎、北蓮蔵、山本森之助、矢崎千代二や三宅克己。ヨーロッパ留学にて親しんだ石井柏亭、金山平三、藤田嗣治、安井曾太郎、小杉未醒、児島虎次郎、太田喜二郎、文学者に与謝野鉄幹・晶子、島崎藤村。萬吾が自宅アトリエに開設した美術教室「同舟舎」には次代の画家の卵が集い、牛島憲之、坂本善三、寺田政明、麻生三郎、清宮質文、駒井哲郎、野見山暁治などがいます。

新しい発見

展覧会準備中、萬吾のこうした交遊歴を知る手がかりとなる、多数の萬吾宛ハガキや写真が新たに確認されました。ハガキの文面は当時の美術家たちの生き生きとした様子を伝えますが、その達筆を読み解くのは難しく、当館歴史分野の職員がその解読を支えています。また、県内の方々の協力を得て、個人宅の調査や聞き取りを行い、これまでわからなかった空白が少しずつ埋められています。長く郷土を離れた萬吾でありながら、その画家人生は、深く郷土に根ざしていたことが見えてきました。さまざまな協力者の助けがあって見出される新知見を、少しでも多く展覧会でご紹介できればと思います。名作とともによみがえる瑞々しい近代の姿をぜひご覧ください。

（主任専門学芸員　窪美　西嘉子）

「小林萬吾宛絵葉書」1911～14年頃　当館蔵

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

特別展
白馬のゆくえ 小林萬吾と日本洋画50年

4月11日（土）～6月7日（日）
会　　場：特別展示室、常設展示室4・5
開館時間：9:00～17:00（入館は閉館の30分前まで）
夜間開館：毎週土曜日は19:30まで
休 館 日：月曜日　※5月4日（月・祝）は開館
観 覧 料：一般1,200円、前売・団体1,000円
※高校生以下、65歳以上、身体障害者手帳等お持ちの方は観覧料無料
■ミュージアム・トーク：5月3日（日）、5月24日（日）　各13:30～
6月7日（日）15:30～
■ボランティアによるギャラリートーク：5月3・10・17・24・31日（日）、
6月7日（日）　各10:30～12:00

調査研究ノート
vol.32

木村黙老（もくろう）のファミリーヒストリー
―黙老ゆかりの資料をもとめて―

木村黙老像
（公益財団法人鎌田共済会郷土博物館蔵）

木村黙老（1774～1856）の名前を知っている人は少ないかもしれませんが、多くの人は黙老の作品を知っているはず……というのは、有名な平賀源内肖像―キセルを手にしたあの源内の肖像画を描いた人物こそ、黙老だからです。江戸時代後期の高松藩家老であった黙老は、坂出塩田を開いて藩の財政立て直しに尽力……と書けば、まじめなエリート官僚を想像しがちですが、他方で芝居見物や小説に熱中し、自らも詩画をよくした文化人でした。大部の随筆『聞くままの記』を書いて源内晩年の殺傷事件を伝えたり、地誌『讃岐国名勝図会（ずえ）』の編纂に関わったり……と、実は私たちが知っている讃岐の江戸時代像は、黙老が何らかの形で関わっていることが少なくありません。

黙老と馬琴

香川県内で「瀧澤文庫」の蔵書印が押された本を見かけることがありますが、なぜでしょうか？　滝沢とは、『南総里見八犬伝』などの長編小説で人気を集めた曲亭馬琴（きょくていばきん）（1767～1848）の本姓で、この馬琴は交際嫌いのため江戸に友人はなく、地方に三人の親友がいたことが知られています。その一人が黙老です。黙老は馬琴作品の大ファンで、お互いに作品の批評や蔵書の貸借を行うなど、二人の交流は近世文学史に名を刻んでいます。馬琴が一家の前途を考えて蔵書を手放そうとした際、黙老はそれらを友人とともに買い取りました。馬琴の蔵書などが香川県に残されているのはそのためです。

また馬琴の息子が38歳で他界した時、黙老は自らの境遇を記した長い手紙を馬琴へ送っています。それによれば、自分は高禄を得ているが家庭的には不運で、父が早世して叔父の養子となるものの叔父の没後は困窮したこと、家族に病人が絶えずいて苦労したことなどを述べ、人の幸福と不幸は変転するものだと親友を慰めています。馬琴も心打たれ、この手紙の全文を『後の為乃記』に掲載しています。

黙老ゆかりの資料をもとめて

木村黙老画「牡丹孔雀図」（当館蔵）

近代になると黙老の膨大な蔵書は散逸を余儀なくされます。木村家に多くあった馬琴の手紙は希望する者にどしどし与えていたと伝えられ、高松近辺には黙老関係資料がかなり伝来していたはずですが、残念ながら多くが高松空襲などで失われたようです。

とはいえ、家族のもとにはゆかりの資料が引き継がれていました。当館が寄贈を受けた黙老晩年の作品「牡丹孔雀図」は、玄孫（やしゃご）の佐竹氏のもとに伝えられていたものです。

また黙老には「せい」という末娘がおり、舞の師匠として高松市民には「富澤先生」の名で知られ、大正7年（1918）に生涯を閉じています。その墓は……？ 探していたところ、高松市の楠川墓地にあり、「富澤玉翁之墓」「俗名せい」と刻まれていました。実は彼女も黙老の肖像画を所持していたと伝えられており、その絵も失われてしまったのでしょうか……ぜひ原本を確認したいものです。

富澤せいの墓（高松市）

（専門学芸員　上野　進）

参考文献：木畑貞清『木村黙老と滝沢馬琴』（香川県教育図書、1935年）

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

高松藩家老・木村黙老とその時代

3月27日（金）～5月17日（日）

会　　場：常設展示室1

■ミュージアム・トーク：4月18日（土）、5月2日（土）各13:30～

ミュージアム
ガイダンス
vol.38

画像利用、資料閲覧対応について

香川県立ミュージアムには約32万点の歴史資料や美術作品等を保管しています。それらを大切に保管するとともに、研究者等にご利用頂いております。今回は「画像利用」と「資料閲覧」についてご紹介します。

画像利用

当館ホームページには次のように掲載しています。

> 香川県立ミュージアムが収蔵、保管する歴史や美術に関わるさまざまな資料画像を出版や放映等に利用される場合は、事前に利用申請の手続きが必要です。利用にあたっては、必ず「香川県立ミュージアム資料画像等利用規約」をご確認の上、「資料画像等利用許可申請書」をご提出ください。

当館ホームページ

画像利用に関する問い合わせは1年を通じて、時季に偏りなくあります。毎年、約100件の画像利用申請を受け付けています。平成30年度では多い順に、出版社やテレビ番組制作会社等マスコミ38.5%、市町等26.9%、個人14.1%となっています。

希望資料が寄託資料の場合、所蔵者の承諾書を添えて申請書をご提出いただいています。

ちなみに、平成30年度で最も申請いただいた資料は「弘法大師像（善通寺御影）」6件、次に多かったのは「高松城下図屏風」5件です。ただし、画帖である「衆鱗図」を含めると28件と最も多くなります。

「弘法大師像（善通寺御影）」当館蔵

資料閲覧

当館の資料利用要綱に「歴史、美術及び民俗に関する普及、啓発及び学術研究に資する」場合、閲覧できるとあります。閲覧を申請する方は大学等の研究者が多いようです。必要な歴史資料や作品を探すために、当館が発行している『収蔵資料目録』やホームページで公開している「館蔵品データベース」を事前にご利用になられているようです。

資料の閲覧は、申請者から事前に電話やメール等でお問い合わせをいただいています。まずは担当職員が資料等の状態を確認します。あわせて、申請者と担当職員双方の日程を調整します。残念ながら、資料の状態が悪い場合は、実見をお断りする場合もあります。画像利用と同様に、希望資料が寄託資料の場合、所蔵者の承諾書を添えて申請書を提出してもらいます。不思議と年末から年度末にかけて、問い合わせが増える傾向にあります。

資料・作品の閲覧を通して、専門に研究されている方と共に歴史資料や美術作品を拝見することは、当館職員の知見も広がるよい機会となっています。

（主任専門職員　谷川　洋朗）

館蔵品データベース画面

閲覧風景（刀絵図作成）

れきみんだより

瀬戸内海歴史民俗資料館職員、子ども時代を大いに語る

今回、瀬戸内海歴史民俗資料館テーマ展「昭和子ども文化展―遊び楽しむ子どもたち―」を開催するにあたり、昭和20～40年代生まれと、年齢層が様々である歴民職員5名の子ども時代について大いに語り合いました。

当時のあそび・流行り

職員A 私は昭和40年代に高松市で生まれ育ちました。小学生中学年の頃、テレビなどのマスメディアの影響もあり「キン肉マンの消しゴム」が流行っていました。子どもたちは近所のスーパーの入口に置かれた「ガチャガチャ」で買っていました。また「ビックリマンシール」も流行していました。これはお菓子に同封されているシールですが、シールだけを目当てに、お菓子を捨てるという問題も起こっていました。

職員B 私は昭和30年代に観音寺市で生まれ育ちました。同じ集落の中でもクリスマスプレゼントなどの際に、農家の子が見たこともないおもちゃをサラリーマンの子どもがもらっているなどの差がありました。普段は近所の子どもたちと缶ケリや、香川県の西の方では「メカチン」と言われたビー玉や、「パッチン」とよばれたメンコなどで遊びました。

職員C 私は昭和40年代に高松市で生まれ育ちました。外でドッジボールや、「エンサ」と言っていたボールつきや、「オンセントリ」と言う地面に線をひいた陣地取りなどをして遊びました。当時、男の子はマジンガーZなどの超合金、女の子はリカちゃん人形によるお人形遊びが流行していました。

職員D 私は昭和20年代に高松市に生まれ、幼少期は大阪で育ちました。私の家付近の川では、材木用の丸太を一面に浮かべ乾かしていました。夏になると、子どもたちの間でその丸太に乗って遊ぶのが流行していました。ただ遊ぶ際、ロープで括（くく）ってある材木に乗るのは良いが、一本一本バラバラになっている材木に乗るのはダメという暗黙の掟がありました。ある日その掟を破った友人が丸太の間に落ち込み、亡くなる事故が起こり、それ以降丸太で遊ぶことは禁止となりました。

幼少期のこづかいは5円から10円であり、駄菓子屋に行き5円でガムなどを買っていた記憶があります。ガチャガチャなどの機械で物を買うことはまずなく、店に行きガラスケースの中にあるお菓子などを取り出して買っていました。隔世の感があります。

職員E 私は昭和30年代に高知市に生まれ、幼稚園の頃に高松市に引っ越しました。小学生の時、近くにあった資材置き場で、2つのグループにわかれ木を組んだ要塞を作り、「戦争ごっこ」をして遊びました。石を投げ合っていましたが、周辺の大人に怒られたことはありませんでした。

子どもの頃印象にのこっていること

職員E 裏山は自分の物であると、あからさまに主張する土地の所有者の子に対して、複数人で団結し、誰のものでも無くみんなのものだと、喧嘩をしたことが印象にのこっています。

職員B 集落内を上級生が下級生を引き連れ、リヤカーをひき廃品回収を行ったことが印象にのこっています。その機会に集落の中のどこにどのような家があるのかを理解することができました。

職員A・C 夏休みのラジオ体操が印象にのこっています。ほぼ毎日あり、その際6年生がラジオを持参し、参加者に確認印を押すなど全て取り仕切り、大人の姿を見ることはありませんでした。

職員B 遊びや行事の中で、年長者が年少者に対して子どもなりのルールなどを決めて社会性を培う、そのような機会が少なくなった感があります。

テーマ展示「昭和子ども文化展―遊び楽しむ子どもたち―」では、それぞれの世代の子どもたちが夢中になって遊んだ流行の遊びや玩具などを取り上げるとともに、家庭や地域社会が行ってきた子どもに関する年中行事などにも焦点をあて、大人の誰しもが体験した子ども文化を紹介します。

（文章　主任専門職員　芳澤　直起）

談話会風景

| 展 | 覧 | 会 | 情 | 報 |

テーマ展
昭和こども文化展 ―遊び楽しむ子どもたち―
3月20日（金・祝）～5月24日（日）
場　　所：瀬戸内海歴史民俗資料館第9・10展示室
開館時間：9:00～17:00　※入館時間は16:30まで
休 館 日：月曜日（5月4日（月・祝）は開館）

令和元年度の展示活動報告
―開館50年に向けて―

瀬戸内海歴史民俗資料館（以下、歴民と表記）は昭和48年（1973）に開館しました。令和4年（2022）には開館50年を迎えます。平成30年（2018）度から5ヵ年間を計画期間とする香川県文化芸術振興計画（以下、県計画と表記）では、〈県民が文化芸術に親しむ基盤と環境の整備〉の項で「歴民の活用」が重点項目として設定されており、特に以下2点について取り組むことが記されています。

・歴民が所蔵する多くの歴史民俗資料について、展示方法を工夫するなどして、県民が優れた文化遺産に親しむ機会を充実させます。

・歴史民俗関係に加え、子ども向けの自然や環境分野の展示を充実させることで、子ども達がこれらの分野を総合的に学習できるような機能を付与することについて検討します。

令和元年度はこの計画にのっとり、収蔵している歴史民俗資料の活用や自然・環境分野との連携に取り組みました。

テーマ展

テーマ展「情熱をもち瀬戸内文化を探り、考え記録した人―高橋克夫展―」では、およそ50年前の開館準備や黎明期に瀬戸内各地を奔走し、資料の収集や調査研究に取り組んだ高橋克夫氏の遺した膨大な記録写真や調査ノート、退職後の四国村民家博物館や牟礼町の石の民俗資料の収集活動などについて紹介しました。英語教員でありながら、50歳を過ぎて資料館の仕事に関わり、驚異的な行動力と熱意で瀬戸内文化の記録・収集にあたった姿勢を再認識するとともに、活動から年月が経てば経つほど、その成果の凄さや有り難さを痛感できるものでした。館の設立に関わった人たちの当時の思いに触れ、開館当初の基本理念に立ち戻る必要性を感じました。

また、巡回展「まちかど生き物標本展」やテーマ展「懐かしの高校理科実験器具と標本展」では、県計画をふまえ県環境森林部局や高校理科分野の先生方と連携した展示を開催しました。当館が収集・展示してきた漁業や農業、林業などの古い道具は、先人が地域の自然や環境との関わりの中で、地形・地質や生物・植物などの習性・特性などを生かして生み出してきたものであることから、自然や環境の理解が人々のくらしやその道具の理解に不可欠と考え、自然分野の方たちとの連携を図ることにしました。

「懐かしの高校理科実験器具と標本展」展示風景

その他、テーマ展「板子一枚下は地獄」では、当館が長年調査してきた海事研究の成果の一端を、イラストレーターにも協力いただき、子どもたちにわかりやすく伝えるための解説シートやパネルの製作・展示を行いました。

館外展示

県の旧計画では〈文化遺産の保存・継承・防災対策〉において、大規模災害時の文化財の保全への取組みが求められ、歴民では県内民俗資料収蔵施設の現況調査やハザードマップへの反映などの基礎調査を行ってきました。その調査において、かつて島の住民から豊島小・中学校に寄贈され授業に使われていた「昔の道具」が、活用されず倉庫にしまわれたままになっていたことがわかりました。そこで、瀬戸内国際芸術祭2019期間中に、それらを島の児童生徒や住民、芸術祭で来島した方々に見ていただき、道具を通してかつての島のくらしや豊かな環境を知っていただく「豊かな恵みを受けて―昔の道具からたどる豊島のくらし―展」を開催しました。小中学校の児童生徒や先生方、島の観光協会のみなさんとも授業や勉強会を通じて交流しました。

また、長年、当館が調査研究・記録化をしてきた県内外の祭礼行事に関わる資料を紹介する県立ミュージアム特別展「祭礼百態―香川・瀬戸内の「風流」展」を歴民企画で開催しました。県内50に及ぶ自治会や保存会の協力を得て、約150点の資料を紹介するとともに、10をこす民俗芸能の公演を行うなど、香川県を中心とした瀬戸内の祭礼文化についての理解を深めていただきました。

今後も開館50年に向け、館がこれまで収集してきた資料を活用していくとともに、それらの道具と自然や環境との関わりを見つめなおすとともに、地域と連携しながら次の50年につながる活動を目指します。

（瀬戸内海歴史民俗資料館長　田井　静明）

「豊かな恵みを受けて―昔の道具からたどる豊島のくらし―展」展示風景